

会 議 概 要

会議の名称	平成29年度第2次社会教育中期計画策定にかかる 第3回 第2専門部会（家庭教育・成人教育・高齢者教育）会議
開催日時	平成29年11月20日（月） 午後 2時30分～
開催場所	湧別町文化センター TOM研修室
出席者名	部会委員～梅田委員、高柳委員、上原委員、杉原委員 オブザーバー～宮澤委員長、石垣副委員長 教委～星課長、杉森係長、土佐主任
欠席者名	多田委員
傍聴人の数	なし
会議の内容	(1) 第2次社会教育中期計画第2専門部会 家庭教育・成人教育・高齢者教育分野の推進目標と課題解決の ための方策について (2) その他
会議資料	会議議案
会議録	■ 有 （ <input type="checkbox"/> 全文筆記 ■要点筆記 ） <input type="checkbox"/> 無
備考	

結果要旨

第2回の続きより協議を行った。

【家庭教育・成人教育・高齢者教育】分野の推進目標と課題解決のための方策について
別紙のとおり

○次回日程の確認

- ・部会は今回をもって終了。次回は、12月中旬以降の社会教育委員全体会議。

2 (てん末書用紙)

○太字下線～変更箇所 (11/20 素案から)

○取り消し線～削除箇所 (11/20 素案から)

【家庭教育の現状と課題】について

第3章 社会教育の現状と課題・推進目標

第1節 家庭教育の現状と課題・推進目標・推進項目

【家庭教育の現状と課題】

家庭教育はすべての教育の原点であり、出発点でもあります。

子どもにとって「家庭」は、子ども自身が家族から愛され、かけがえのない存在であることを実感し、心の安定と安心を得て「生きる力」を養う場所であるとともに、家族の歴史や生き方を学び、社会生活に必要な望ましい生活習慣やマナーなどを身につけるところです。

家庭を取り巻く環境は、多様で便利な生活が実現する一方で核家族化により家庭教育は孤立の傾向にあります。

生活スタイルや価値観の多様化は、地縁的なつながりを希薄にし、近所での気軽な話し合いや助け合いを減少させています。加えて核家族化は、親から子育ての援助や知恵が得られにくい状況をつくり出しています。とりわけ、子どもを通して他の親と交流する機会の少ない0～3歳児を持つ核家族の親にとっては、子育ての不安や悩みを相談しにくい環境に置かれているといえます。子どもはまちの宝であり地域全体で守り育てていかなければなりません。

現在、子どもの誕生を祝う民間有志団体が発足し、活動を続けています。一方、幼保小中高生の保護者を対象に家庭教育の大切さを学習する場として開催している「家庭教育研修会」は異年齢の親が一堂に会し、交流を深め、経験から学ぶ良い機会ですが、参加者が少ない状態が続いています。さらに、各校の教頭先生による「家庭教育推進員」としての活動および学校単位での「家庭教育学級」の活動、PTAにおける取り組みも親同士のよい交流機会となっていますが、参加者数が少なく運営に苦慮するほか、学級の新規設置も進まない状況にあります。周囲との関わりに消極的な家庭も見受けられるため、開催方法の工夫により参加を促すことも必要です。そのほか、個別の事情に寄り添う教育アドバイザーによる常設の家庭教育相談も実施しています。乳幼児期の家庭教育支援については、ブックスタートをはじめとする図書館事業や民間団体によるブックカフェの実施、子育て支援課による育児学級事業などがありますが、情報の発信・共有を含め連携が必要です。

子どもが置かれている環境は危うい状況です。社会のモラルが低下し、非人道的な犯罪が頻発し、有害な動画配信やSNS等を通して、大量の情報が刺激的に子どもたちの中に入り込んでいます。発達段階を無視して整理されないまま子どもの中に入ってくる大量の情報は、健やかな成長の阻害要因になり、いじめ、非行、犯罪への誘発要因ともなっています。家族が一緒に集い暮らし、団らんの語らいの中でゆったり行われる家庭教育の役割、重要度は、今日より大きくなっているといえます。

⇒以下、＜今後の課題＞より協議。

＜今後の課題＞

- 家庭と地域の教育力向上を図るために、地域社会における家庭教育支援の大切さを広く周知する必要があります。
- 0～3歳児を持つ親への支援や団体間の連携を強化する必要があります。
- 対象者が集まる現場に向いた事業展開を検討する必要があります。
- 「家庭教育学級」が、すべての学校で開設できるよう働きかけるとともに、「家庭教育研修会」の意義・役割を広める必要があります。
- 家庭教育支援に関わる機関との情報の共有・連携を強化する必要があります。
- **孤立しがちな子育て世代を支援するため、ボランティアを育成する必要があります。**

(推進目標と推進項目)

家庭教育 推進目標	子どもは町の宝 手を取り合い、支え合って育てよう
--------------	--------------------------

項 目		課題解決のための方策
人、自然、ふるさとから学び、地域と共に生きる	学習機会の提供	<ul style="list-style-type: none"> ●家庭教育への理解を深める研修事業を充実する。 ●家庭教育を担う保護者が必要とする情報を発信する（情報誌やインターネットなど各種メディアの活用）。
	活動等の支援	<ul style="list-style-type: none"> ●「家庭教育学級」など、家庭教育への意識を高める学習活動を支援する。 ●子育てサークル等の育成と支援を充実する。
	学習環境づくり	<ul style="list-style-type: none"> ●「家庭教育学級」の全町の小中学校開設を促進する。 ●子育ての悩みや喜びをわかちあえる「気軽に集う場（サロン）」を創設する。
	連携・ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> ●子どもの育ちを支えるネットワークを構築する。 ●家庭教育を担う保護者の発言が反映されるメディア（＝情報媒体）を構築する。 ●子育て支援センターや図書館など、各種関係機関・団体との協力体制をつくり、連携を図る。

梅 田：＜今後の課題＞の 3 項目目の「対象者が集まる」という部分は限定的なイメージがあり、また、なくても十分伝わると考え削除した。6 項目目の追加部分は方策というよりも、解決するための課題だと考えたので方策から課題へと移動した。

宮 澤：出向くとはどういうことか。意味が分からない。

梅 田：集まっているところに出向くイメージ。家庭教育が主たる目的ではない集まりに出向いていく。（そこにも家庭教育に関係する人は参加しているから）

宮 澤：何の権利でそこに出向くのか。誰が求めているのか。

石 垣：文章が雑ばく過ぎて、「誰が何のために？」「何を対象に何をするのか？」が分からない。家庭教育の意識を上げるための書き方なら良いが、漠然とし過ぎている書き方では分からない。今まで様々な分野で「出向く」という試みを行ってきたが、何も残っていない。

梅 田：「出向く」というのは、外に目を向け働きかけるという意味合いもある。そういう意識の共有をして働きかける。

事務局：学習の場を提供しても参加できない人（参加しない人）がいる。そういった方にも情報を提供したい。我々が提供する学習の場には参加できなかったが、違う集まりには参加している方もいると思うので、そういった違う集まりに出向くことで潜在的な対象者にも情報を提供していきたい。

高 柳：夜回り先生のようなイメージなのかと思った。

4 (てん末書用紙)

杉原:「出向く」とあるが、違う集まりに出向いたとしても参加者はそれを目的に集まっていない上、時間を割いて参加しているので、急に出向いてきた別のものに対して話を聞こうと集まらないと思う。「出向く」より、そういう集まりがある場合、チラシを配って啓発するようなやりの方が良いのではないか。町のHPはほとんど見ないので、紙媒体でした方が良い。

⇒第3項目目に関して、その他、「事業展開とはしない方が良い」などの意見もあり、一旦持ち帰り、梅田部会長と事務局により文言整理をした上で、学習環境づくりの方策へ移動することとした。各、推進目標については、現在進行形の目標で、文言としてもその通りなので変更はしないこととなった。その他、推進項目は素案のとおり。

第4節 成人教育の現状と課題・推進目標・推進項目

【成人教育の現状と課題】

成人期は、職場や家庭、地域において、中心的な役割を担い、体力、知力的に最も社会に貢献できる時期であり、それぞれの立場で、地域や団体活動の中心的役割を果たすことが期待されている時期です。

しかし成人期は、その立場から毎日が忙しく、社会参加や自主的な活動は、参加の意欲がありながら難しい状況にあります。

一方で成人の75歳以上を高齢期として区分し、65歳から74歳までを社会に参加しながら健康な高齢期に備える時期と定義する動きもあります。65歳から74歳までの町の人口は1,445人で総人口の15.8% (平成29年6月末) を占めていますので、この世代を成人期に区分することで人材の幅は大きく広がります。しかしこの世代の現状としては、地域の中心的担い手として活躍する方がいる一方で、地域活動に消極的な方も少なくありません。

現在、町民を講師に迎えて、町の歴史、産業、自然等を町民が学ぶ機会を提供する「ふるさと講座」が町民有志によって運営され、さまざまなつながりが生まれ定着しつつあります。また、実行委員会が運営する「町民大学」では、高度で専門的な学習要求に応えるため、第一線で活躍している講師を招いて実施し、町民の貴重な学習機会になっていますが、参加数は講師の知名度に大きく左右される状況が続いています。また、ボランティア団体、PTA等の社会教育関係団体や有志によるグループ・サークルが自主的に講座や鑑賞会などの社会教育活動を行っており、これらの活動に対して教育委員会が必要な支援を行っています。今後は、働き盛りの成人と退職後の成人がそれぞれの役割を補い合い、世代間、産業間等の連携をとりながら、世代を束ねるリーダーとなるよう積極的に地域と関わることが求められています。

⇒以下、〈今後の課題〉より協議。

〈今後の課題〉

- 「ふるさと講座」は、湧別町の歴史、産業、自然等を学ぶ機会および指導者養成の場として支援する必要があります。
- 「町民大学」は、来場者数を目標とするだけでなく、参加者(団体)や実行委員と講師とのつながりをより深めるなど、人材育成の側面も意識した事業展開を奨励する必要があります。
- 時間的余裕のない成人期のニーズや、退職後の世代の多様なニーズに応えられるよう、情報提供も含め参加し活躍する場を創出する必要があります。
- 世代間交流、異業種間交流を推進し、まちづくりの人材育成を図るため、企画やまちづくり等、町の他部局との情報共有も含めた連携強化が必要です。
- 学習を支援するコーディネーターを育成する必要があります。**

(推進目標と推進項目)

成人教育 推進目標	成人は町の大黒柱 すすんで地域に関わろう
--------------	----------------------

項 目	課題解決のための方策
人、 自然、 ふるさと から学び、 地域と共 に生きる	学習機 会の提 供 <ul style="list-style-type: none"> ●幅広い学習ニーズに応える学習機会の提供と学習意欲を喚起する。 ●ふるさとを学ぶ機会の充実を図る。 ●既存事業（町民大学等）の魅力を広く伝える。 ●地域に関する学習機会を提供する。
	活動等 の支援 <ul style="list-style-type: none"> ●社会教育各種団体等へ支援を図る。 ●おたがいの仕事や暮らしぶりを知り、地域を知ることにつながる学習活動を支援する。 ●自主的に企画し実践するサークルなどの活動支援を充実する。 ●事業を反省評価し、次へ生かす取り組みを支援する。
	学習環 境づく り <ul style="list-style-type: none"> ●行政と住民の協働事業を推進する。 ●参加者に開会日時や託児サービスなどを配慮した事業を行う。 ●気楽に参加し、すすんで活動できるよう情報の提供に努めます。
	連携・ ネット ワーク <ul style="list-style-type: none"> ●各種団体間の交流を促進する。 ●関係機関との連携を図る。

⇒素案のとおり

第5節 高齢者教育の現状と課題・推進目標・推進項目

【高齢者教育の現状と課題】

年齢や家庭状況、健康状態等によっても差異がありますが、時間的に余裕のある高齢期は、長年培ってきた知恵や経験、技能を生かした社会参加を通して、生きがいのある充実した生活をおくることが期待されています。

湧別町の65歳以上の人口は、全体の37.0%、75歳以上では21.2%（いずれも平成29年6月末）を占めています。地域づくり、まちづくりにおける高齢者の果たすべき役割はより大きくなっており、地域の教育力を高めることにもつながっています。

現在の取り組みとして、湧別地区には生きがい大学、上湧別地区には寿学級が開講されていますが、80歳以上の高齢層が占める割合が増え、自主運営が難しくなってきたことから、基盤強化のため統合に向けた話し合いが進んでいます。2つの高齢者学級では、健康づくりや医療、福祉、終活などをテーマとした学習のほか、演芸やレクリエーションで交流活動が行われています。

また、受身の学習ばかりではなく、学校児童生徒との交流会、子ども百人一首教室の指導など、高齢者が出向いて活躍する場も増えています。

6 (てん末書用紙)

しかし、積極的にグループに所属などして、活発に活動する高齢者がいる一方、地域、社会との交流を持たず、家に引きこもりがちな高齢者が少なくないのも現実です。今日の問題として、要介護（要支援を含む）認定者数が町内で600人を超えるなど、介護予防の必要性が高まっており、その対応も求められています。
 高齢者が家族に尊敬され、地域で頼りにされ、感謝される喜びの中で生きがいを持てるようにすることが重要です。

⇒以下、＜今後の課題＞より協議。

＜今後の課題＞

- 「高齢者学級」では、主体的な取り組みを可能にする支援が必要です。
- 高齢者が持つ知識や経験、技能を地域や次世代に伝える機会を提供し、生きがいを持てるようにする必要があります。
- 家にこもりがちな高齢者に、地域の身近な情報を提供するとともに、より参加しやすい少人数でのグループ活動などの場を創出する必要があります。
- 60代で退職し、第2の人生をスタートした方たちが、地域の団体に加入する等、積極的参加を促すとともに活躍の場を提供する必要があります。

(推進目標と推進項目)

高齢者教育 推進目標	高齢者は町の知恵袋 豊かな経験を地域で生かそう
---------------	-------------------------

項目	課題解決のための方策	
人、自然、ふるさとから学び、地域と共に生きる	学習機会の提供	<ul style="list-style-type: none"> ● 高齢者の興味関心を呼び起こす事業を創設する。 ● 知識や知恵をもった高齢者から学ぶ機会を創設する。 ● ふるさとを伝える機会を創設する。
	活動等の支援	<ul style="list-style-type: none"> ● 高齢者学級の参加者による自主活動の促進と充実を図る。 ● 次の世代に伝承する異世代間交流事業を充実する。
	学習環境づくり	<ul style="list-style-type: none"> ● 知識や知恵を持つ高齢者を把握し、活かすようコーディネートを充実する。 ● 長寿社会を生きるそれぞれの年齢に応じた学習ニーズを把握し、次世代に豊かな経験を伝える機会を創出する。 ● 少人数でも気軽に参加しやすい環境づくりに努める。
	連携・ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> ● 高齢者学級と他団体との連携を図る。 ● 高齢者の豊かな経験を生かすために関係機関との連携を図る。

杉原：家にこもりがちの高齢者を引き込むことは難しい。

梅田：各家庭で当たり前のように伝えられてきた漬物の漬け方など、生活に根ざした知識が団塊の世代でも分からなくなっている。そのような知識を伝える場は必要だと感じている。そういった知識を持った高齢者を把握することが大切だ。

宮澤：生活に根ざした知識が特別な知識になってきている。知識の伝承は大切なことと感じている。

事務局：学習機会の提供の2項目目と学習環境づくりの2項目目が重複しているような印象を与える文言になってしまったが問題ないか。

委員一同：問題ない。

⇒推進項目の学習環境づくりの項目を下記のとおりとする。

- 知識や知恵を持つ高齢者を把握し、活かすようコーディネートを充実する。
- 長寿社会を生きるそれぞれの年齢に応じた学習ニーズを把握し、次世代に豊かな経験を伝える機会を創出する。
- 少人数でも気軽に参加しやすい環境づくりに努める。

会議後、事務局で文言整理した部分については、事前に部会長の了解を得た上で、次回の全体会議に諮る。

平成29年度

第2次湧別町社会教育中期計画策定にかかる
第3回 第2専門部会（家庭教育・成人教育・高齢者教育） 会議

と き 平成29年11月20日（月）
午後2時30分～

ところ 文化センターTOM

<会議日程>

1. 開 会

2. 部会長あいさつ

3. 議 題

- 第2次社会教育中期計画専門部会
家庭教育・成人教育・高齢者教育分野
 - ・推進目標について
 - ・課題解決のための方策について

4. その他

- 次回日程の確認

5. 部会長あいさつ

6. 閉 会

<第2専門部会構成員>

部会長 梅田唯士

部 員 高柳雅一、多田恵美子、上原和恵、杉原武純

委員長 宮澤 道 副委員長 石垣誠一

事務局 星義孝、杉森伸一、土佐信太郎、太田雅史

第3章 社会教育の現状と課題・推進目標

第1節 家庭教育の現状と課題・推進目標・推進項目

【家庭教育の現状と課題】

家庭教育はすべての教育の原点であり、出発点でもあります。

子どもにとって「家庭」は、子ども自身が家族から愛され、かけがえのない存在であることを実感し、心の安定と安心を得て「生きる力」を養う場所であるとともに、家族の歴史や生き方を学び、社会生活に必要な望ましい生活習慣やマナーなどを身につけるところです。

家庭を取り巻く環境は、多様で便利な生活が実現する一方で核家族化により家庭教育は孤立の傾向にあります。

生活スタイルや価値観の多様化は、地縁的なつながりを希薄にし、近所での気軽な話し合いや助け合いを減少させています。加えて核家族化は、親から子育ての援助や知恵が得られにくい状況をつくり出しています。とりわけ、子どもを通して他の親と交流する機会の少ない0～3歳児を持つ核家族の親にとっては、子育ての不安や悩みを相談しにくい環境に置かれているといえます。子どもはまちの宝であり地域全体で守り育てていかなければなりません。

現在、子どもの誕生を祝う民間有志団体が発足し、活動を続けています。一方、幼保小中高生の保護者を対象に家庭教育の大切さを学習する場として開催している「家庭教育研修会」は異年齢の親が一堂に会し、交流を深め、経験から学ぶ良い機会ですが、参加者が少ない状態が続いています。さらに、各校の教頭先生による「家庭教育推進員」としての活動および学校単位での「家庭教育学級」の活動、PTAにおける取り組みも親同士のよい交流機会となっておりますが、参加者数が少なく運営に苦慮するほか、学級の新規設置も進まない状況にあります。周囲との関わりに消極的な家庭も見受けられるため、開催方法の工夫により参加を促すことも必要です。そのほか、個別の事情に寄り添う教育アドバイザーによる常設の家庭教育相談も実施しています。乳幼児期の家庭教育支援については、ブックスタートをはじめとする図書館事業や民間団体によるブックカフェの実施、子育て支援課による育児学級事業などがありますが、情報の発信・共有を含め連携が必要です。

子どもが置かれている環境は危うい状況です。社会のモラルが低下し、非人道的な犯罪が頻発し、有害な動画配信やSNS等を通して、大量の情報が刺激的に子どもたちの中に入り込んでいます。発達段階を無視して整理されないまま子どもの中に入ってくる大量の情報は、健やかな成長の阻害要因になり、いじめ、非行、犯罪への誘発要因ともなっています。家族が一緒に集い暮らし、団らんの語らいの中でゆったり行われる家庭教育の役割、重要度は、今日より大きくなっているといえます。

<今後の課題>

- 家庭と地域の教育力向上を図るために、地域社会における家庭教育支援の大切さを広く周知する必要があります。
- 0～3歳児を持つ親への支援や団体間の連携を強化する必要があります。
- 対象者が集まる現場に出向いた事業展開を検討する必要があります。
- 「家庭教育学級」が、すべての学校で開設できるよう働きかけるとともに、「家庭教育研修会」の意義・役割を広める必要があります。
- 家庭教育支援に関わる機関との情報の共有・連携を強化する必要があります。
- 孤立しがちな子育て世代を支援するため、ボランティアを育成する必要があります。（方策から移動）

(推進目標と推進項目)

家庭教育 推進目標	子どもは町の宝 手を取り合い、支え合って育てよう
--------------	--------------------------

課題解決のための方策		
人、自然、ふるさとから学び、地域と共に生きる	学習機会の提供	<ul style="list-style-type: none"> ● 家庭教育への理解を深める研修事業を充実する。 ● 家庭教育を担う保護者が必要とする情報を発信する（情報誌やインターネットなど各種メディアの活用）。
	活動等の支援	<ul style="list-style-type: none"> ● 「家庭教育学級」など、家庭教育への意識を高める学習活動を支援する。 ● 子育てサークル等の育成と支援を充実する。
	学習環境づくり	<ul style="list-style-type: none"> ● 「家庭教育学級」の全町の小中学校開設を促進する。 ● 孤立しがちな子育て世代を支援するためにボランティアを育成する。⇒課題へ移動 ● 子育ての悩みや喜びをわかちあえる「ママ友プロジェクト」(仮称)気軽に集う場(サロン)を創設する。
	連携・ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> ● <u>花火の打ち上げなど、子どもの誕生を祝福する地域子どもの育ちを支える</u>ネットワークを構築する。 ● 家庭教育を担う保護者の発言が反映されるメディア(=情報媒体)を構築する。 ● 子ども子育て支援センターや図書館など、各種関係機関・団体との<u>協力体制をつくり、</u>連携を図る。

第4節 成人教育の現状と課題・推進目標・推進項目

【成人教育の現状と課題】

成人期は、職場や家庭、地域において、中心的な役割を担い、体力、知力的に最も社会に貢献できる時期であり、それぞれの立場で、地域や団体活動の中心的役割を果たすことが期待されている時期です。

しかし成人期は、その立場から毎日が忙しく、社会参加や自主的な活動は、参加の意欲がありながら難しい状況にあります。

一方で成人の75歳以上を高齢期として区分し、65歳から74歳までを社会に参加しながら健康な高齢期に備える時期と定義する動きもあります。65歳から74歳までの町の人口は1,445人で総人口の15.8%（平成29年6月末）を占めていますので、この世代を成人期に区分することで人材の幅は大きく広がります。しかしこの世代の現状としては、地域の中心的担い手として活躍する方がいる一方で、地域活動に消極的な方も少なくありません。

現在、町民を講師に迎えて、町の歴史、産業、自然等を町民が学ぶ機会を提供する「ふるさと講座」が町民有志によって運営され、さまざまなつながりが生まれ定着しつつあります。また、実行委員会が運営する「町民大学」では、高度で専門的な学習要求に応えるため、第一線で活躍している講師を招いて実施し、町民の貴重な学習機会になっていますが、参加数は講師の知名度に大きく左右される状況が続いています。また、ボランティア団体、PTA等の社会教育関係団体や有志によるグループ・サークルが自主的に講座や鑑賞会などの社会教育活動を行っており、これらの活動に対して教育委員会が必要な支援を行っています。

今後は、働き盛りの成人と退職後の成人がそれぞれの役割を補い合い、世代間、産業間等の連携をとりながら、世代を束ねるリーダーとなるよう積極的に地域と関わることが求められています。

<今後の課題>

- 「ふるさと講座」は、湧別町の歴史、産業、自然等を学ぶ機会および指導者養成の場として支援する必要があります。
- 「町民大学」は、来場者数を目標とするだけでなく、参加者（団体）や実行委員と講師とのつながりをより深めるなど、人材育成の側面も意識した事業展開を奨励する必要があります。
- 時間的余裕のない成人期のニーズや、退職後の世代の多様なニーズに応えられるよう、情報提供も含め参加し活躍する場を創出する必要があります。
- 世代間交流、異業種間交流を推進し、まちづくりの人材育成を図るため、企画やまちづくり等、町の他部局との情報共有も含めた連携強化が必要です。

○学習を支援するコーディネーターを育成する必要があります。（方策から移動）

(推進目標と推進項目)

成人教育 推進目標	成人は町の大黒柱 すすんで地域に関わろう
--------------	----------------------

項 目		課題解決のための方策
人、自然、ふるさとから学び、地域と共に生きる	学習機会の提供	<ul style="list-style-type: none"> ● 幅広い学習ニーズに応える学習機会の提供と学習意欲を喚起する。 ● ふるさとを学ぶ機会を創設する。の充実を図る。 ● 既存事業（町民大学等）の魅力を広く伝える。 ● 地域に関する学習機会を提供する。
	活動等の支援	<ul style="list-style-type: none"> ● 社会教育各種団体等へ支援を図る。 ● おたがいの仕事や暮らしぶりを知り、地域を知ることにつながる学習活動を支援する。 ● <u>自らが自主的に</u>企画し実践する<u>サークルなどの</u>活動支援を充実する。 ● <u>事業を反省評価し、次へ生かす取り組みを支援する。</u>
	学習環境づくり	<ul style="list-style-type: none"> ● 既存事業のイノベーションを図る。 ● 行政と住民の協働事業を推進する。 ● 参加者に開会日時や託児サービスなどを配慮した事業を行う。 ● <u>学習を支援するコーディネーターを育成する。</u>（今後の課題へ） ● <u>気楽に参加し、すすんで活動できるよう情報の提供に努めます。</u>
	連携・ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> ● 各種団体間の交流を促進する。 ● 関係機関との連携を図る。

第5節 高齢者教育の現状と課題・推進目標・推進項目

【高齢者教育の現状と課題】

年齢や家庭状況、健康状態等によっても差異がありますが、時間的に余裕のある高齢期は、長年培ってきた知恵や経験、技能を生かした社会参加を通して、生きがいのある充実した生活をおくることが期待されています。

湧別町の65歳以上の人口は、全体の37.0%、75歳以上では21.2%（いずれも平成29年6月末）を占めています。地域づくり、まちづくりにおける高齢者の果たすべき役割はより大きくなっており、地域の教育力を高めることにもつながっています。

現在の取り組みとして、湧別地区には生きがい大学、上湧別地区には寿学級が開講されていますが、80歳以上の高齢層が占める割合が増え、自主運営が難しくなってきたことから、基盤強化のため統合に向けた話し合いが進んでいます。2つの高齢者学級では、健康づくりや医療、福祉、終活などをテーマとした学習のほか、演芸やレクリエーションで交流活動が行われています。

また、受身の学習ばかりではなく、学校児童生徒との交流会、子ども百人一首教室の指導など、高齢者が出向いて活躍する場も増えています。

しかし、積極的にグループに所属などして、活発に活動する高齢者がいる一方、地域、社会との交流を持たず、家に引きこもりがちな高齢者が少なくないのも現実です。今日の問題として、要介護（要支援を含む）認定者数が町内で600人を超えるなど、介護予防の必要性が高まっており、その対応も求められています。

高齢者が家族に尊敬され、地域で頼りにされ、感謝される喜びの中で生きがいを持てるようにすることが重要です。

<今後の課題>

- 「高齢者学級」では、主体的な取り組みを可能にする支援が必要です。
- 高齢者が持つ知識や経験、技能を地域や次世代に伝える機会を提供し、生きがいを持てるようにする必要があります。
- 家にこもりがちな高齢者に、地域の身近な情報を提供するとともに、より参加しやすい少人数でのグループ活動などの場を創出する必要があります。
- 60代で退職し、第2の人生をスタートした方たちが、地域の団体に加入する等、積極的参加を促すとともに活躍の場を提供する必要があります。

(推進目標と推進項目)

高齢者教育 推進目標	高齢者は町の知恵袋 豊かな経験を地域で生かそう
---------------	-------------------------

項 目	課題解決のための方策
人、自然、ふるさとから学び、地域と共に生きる	学習機会の提供 <ul style="list-style-type: none"> ● 高齢者の興味関心を呼び起こす事業を創設する。 ● 知識や知恵をもった高齢者から学ぶ機会を創設する。 ● ふるさとを伝える機会を創設する。
	活動等の支援 <ul style="list-style-type: none"> ● 生きがい大学・寿学級高年齢者学級の参加者による自主活動の促進と充実を図る。 ● 次の世代に伝承する異世代間交流事業を充実する。
	学習環境づくり <ul style="list-style-type: none"> ● 知識や知恵を持つ高齢者を活かすコーディネートを充実する。 ● 長寿社会を生きるそれぞれの年齢に応じた学習ニーズを把握し、<u>次世代に豊かな経験を伝える機会を創出する。</u>
	連携・ネットワーク <ul style="list-style-type: none"> ● 生きがい大学と寿学級の相互交流を促進する。 ● 生きがい大学・寿学級高年齢者学級と他団体との連携を図る。 ● 高齢者の豊かな経験を活かすために関係機関との連携を図る。